雑録の係りへ

新小説雑録 383号

383 新小說 雜錄

# 生残つた男

平山蘆江

一

「ねえ、もう舟は随分沖へ行つてるでせうね」と女が云ふ、

「うむ」と男は船の中から窓をさぐらつかして遠ら浪を呼る、呼つて女が「淋しいかし」と云つて女をちらと見る。

女は遠方を見たら、

「喜吉から出るので淋しいかしら」と男は又云つた、

384 新小說 雜錄

「淋しいわ」と女がほつとした。

「馬鹿し」と嫁は一喝して、男の握る手は食卓の端へグワンと落ちた。

他の卓子の客は一斉に此方を向いた。

「だつて淋しいんですもの。怒られは仕方がないわ、と女の顔はほのかに笑つた。

「咲い、ハハ」と男は頬を隠を口にして「怒りやしない、怒りやしないから、宥めすかせた。

二